

第3回府中市文化芸術推進計画検討協議会会議録

1 日 時 令和7年3月21日（金）午前9時30分～午前11時30分

2 場 所 府中駅北第2庁舎3階打合せ室

3 出席者（敬称略）

(1) 委員8名

大平洋介委員、小野一之委員、小林真理委員、新井有佐委員、玉村明日香委員
橋本善八委員、鹿島伸明委員、澤井すみ子委員

※ 小林瑞恵委員、中村洋子委員 欠席

(2) 職員5名

佐藤文化スポーツ部長、平澤文化生涯学習課長、斎藤文化生涯学習課長補佐、
中司主任、佐藤主任

4 報告事項

(1) 配布資料の確認

ア 会議次第

イ 資料1 第2回文化芸術推進計画検討協議会会議録（案）

ウ 資料2 第2回文化芸術推進計画検討協議会振り返りシート

エ 資料3 現行計画の施策評価シート

オ 資料4 次期府中市文化芸術推進計画骨子（案）

(2) 前回会議録の確認

各委員に校正を依頼した前回会議録（案）について、市民に公開することが了承された。

5 審議事項

骨子（案）の検討

会長： まず文化の定義の範囲、次に基本理念、また、基本施策の方向性を検討したい。

委員： 全体を通して、ハードからソフトへの変化を改めて感じた。府中市は、文化遺産も文化資源も豊富にあり、それらを活用したソフト面の充実を重視していく流れが見て取れた。文化芸術の担い手育成が重要になるのではないかと改めて考えている。

前回、市民アンケートで府中のシンボルという問いに対して、駅前の参道と答えた方がいた。一方で、まちなかのパブリックアートはシンボルとして挙げられていない。上質な彫刻群を活かさない手はないのではないかと。府中市では「府中市 彫刻のあるまちづくり事業」を90年代に始め、17基あると聞いている。この他にもかなりの数の彫像が市内に点在しており、その中には北村西望、佐藤忠良などの代表作もある。彫刻は、人物顕彰的なものと芸術作品の両方があると思うが、その両方を兼ね備えたものが分倍河原駅前の新田義貞公之像であるが、埋もれてしまっている。新田義貞公之像を活用しながら文化芸術を推進しても良いのではないかと。

駅前の銅像は、甲府の武田信玄や岐阜の織田信長など、まちづくりの恩人が主である。新田義貞は合戦を通して府中のまちを混乱させた人物かもしれないが、そもそも新田義貞がどのような人物であるか、また府中が合戦の場であったことが知られていない。なぜ府中で合戦が起きたのかというと、古代中世に府中に国府があったからである。国府があったことは府中の歴史で一番重要な点である。これらを活かしてはどうか。

現行計画でも地名の由来碑の管理については触れられているが、パブリックアートについては触れられていない。

会長： 基本施策3に、これまでの資源を文化資源と捉えなおして活用するという内容を追加しても良いのではないかな。

委員： 資料4の策定の目的の中に記載されている「更に新しい文化を生み出していくこと」という一文が興味深い。また、基本施策4「市内外から人々が集い、文化を通して交流とにぎわいが生まれるまちづくり」とあるが、改めてまちづくりについて考えると、市民が対象となるのはもちろん、まちを構成する主体として企業も考えられるのではないかな。

企業側も社会貢献や市民とのつながりを大きな課題として捉えており、企業と地域の接点として、つながる場面を持ってないと聞いたことがある。文化芸術の支援、市民活動支援の意味でも関わりを持ちたいと思っても、どのような形で関わっていけるのか糸口が持てないという課題がある。「更に新しい文化を生み出す」、「まちづくり」という中に、このような視点があっても良いのではないかな。市として取り組んでいくことで、企業にとっても、市民にとっても面白い形になるのではないかな。

同じく資料4の「計画推進に向けて」の中で、「多様な主体と連携した推進体制」とあるが、多様とは何か、主体とは何かを考え直し、市民だけでなく企業もまちを構成していく主体として焦点を当てると良いのではないかな。

会長： 重要な視点であると改めて感じた。

委員： 第2回の議事録から、文化の広義の捉え方、計画推進に向けての協働というキーワードに着目している。

文化の広義の捉え方として、人間の営みに携わる様々なものが文化とあるが、生活の中での文化や、交流を生み出すものとしての文化という視点が重要だと感じている。日々文化芸術に取り組んでいる人、意識はしていないが文化芸術に取り組んでいる人たちを取りこぼさない視点が重要ではないかな。

協働というキーワードについて、前回の議事録の中で、社会、地域の課題を解決することが一つの手段となるという発言があったが、協働し、それぞれの主体が合わさることで次の新たな文化芸術が生まれるのではないかな。次のステップとして協働というキーワードに着目したい。

委員： 企業との連携は非常に重要である。企業と同様、各人も年齢、経験が異なり、全員が仕事をしているわけではないが、各人が各人という人間を経営している。この考え方からすると、提供してもらえる要素は世の中に無限にあり、どのように引き出していくかに着目している。

長い間美術館に携わり、博物館、劇場も同様だが、発信者と受け手がいる。今後、極端な少子化、高齢化が同時進行し、今までの需要と供給のバランスが崩れ、文化を供給する環境が変化する。各人の個性、経験を社会に還元し

ていくことで、子ども、障害者に対して人生経験を還元できる。その中で文化を活用していくことによって満足度も変わる。各人の持っているものを活かすことで、残った時間を幸せに生きることができる。

世田谷美術館では、「企業と美術」というシリーズを展示している。100年以上続く企業が、どのように人間の暮らしをリードし、支えてきたかを企業の文化度、社会貢献度を示すことによって検証した展示である。この展示を通して、暮らしと関係ない企業活動はないが、そのことに企業の側が気付いておらず、企業と地域の人々との接点がないことが分かった。発信するだけでは、受け手の理解度は測れないが、具体的に企業との連携に取り組むことで、可能性が広がるのではないかと。

潜在的な環境、人の心を開いていける空気が府中にはある。一番難しいことは情報発信である。とある講演会で、聴講者の一人が、「現代はスマートフォンで何でも調べられる。“現物を見る”という体験をどのように提供したら良いか」と質問し、登壇者が「一番危惧していることだ」と答えた。場を提供し続けることも重要だが、循環型の仕組みを作り、発信することが一番難しい。情報が行き渡ることは難しいが、そういったことを踏まえ、計画を作っていければ良いのではないかと。

また、文化芸術推進という言葉自体が固い。芸術という概念が固定化されてしまっているため、府中市らしいネーミングにできると良いのではないかと。

会長： 正式名称とは別に愛称を考えられたら良い。

委員： この協議会に市民の方々がどれくらい参加しているのか気になる。アンケートには多様な市民の声が集約されているが、それが次の計画に反映されるのか疑問だ。

市民の気持ちはアンケートの一つ一つに表れている。アンケートの回答をどのように市民に開示するのか、いつ対応するのか、丁寧に答えた方が良い。これまで様々な会に参加してきたが、アンケートに対してしっかり答えるべきだと感じる。前回も、アンケートを基にPDCAを回した方が良いと話したが、アンケートを活かすという点を軸に話をしたかった。

分かりやすい表現で「できていないこと」を明確にし、そこから問題点を深掘りしなければ市民の意見は出てこないのではないかと。

市民も多くの困りごとを抱えているが、市外の人たちから見ると、府中は設備が充実していると評価されて終わってしまう。骨子案の2ページには具体的な施設名が記載されているが、アンケートの中に、どの施設で何をやっているか分からないという意見があった。そういったところから深掘りし、なぜ施設やイベントに来ないのか、有識者からも意見をもらいながら検討していくことが重要だ。

会長： その通りだと考える。そのためにアンケートを集計しており、集計結果は計画の資料編にも掲載することになると考えている。

前回から、文化センターの魅力向上について気にされているが、骨子案に赤字で追記している。

委員： 男女共同参画センター「フューラル」があるが骨子案には出てきていない。

会長： 多様な主体との連携とはそういうことであると考えている。今まで芸術や文化財等に特化していたが、市民活動も文化活動に含まれるという意見もあ

った。「多様な主体と連携した推進体制」が計画推進に向けた目標であり、男女共同参画センタ「フチャール」は最も文化の分野に近く、当然含まれるものと考えている。

委員： 範囲と組織を明確にした上で市民に示すべきである。アンケートの回答の中で「どこで何をやっているかが分からない」という意見が一番印象的だった。

資料2は、回答が対応策になっている。10年間の成果について、現状把握が一番大事であり、アンケートの中で何を抽出し、この結果になったのかという示し方をしてほしい。民意にどのように対応するかという検討をしていきたい。

会長： とても重要な意見である。策定の背景や目的については、現状の問題に対して第2期で改善していくという書き方にすべきである。

府中市が今までやってきたこと、やってこれなかったことはアンケートで明確になっているため、計画の最初の部分に示し、これを改善するという宣言をしてほしい。

委員： 文化芸術を市民の方々に裾野を広げて伝えることは難しい。文化芸術を可視化することが目的ではなく、文化芸術を市民の方々に分かりやすく伝えることを、市が独自に考えてみてはどうか。分かりやすい表現を用いて、誰が見ても納得するように可視化できれば良い。

時代を担っていくという観点から、子どもたちの将来の選択肢を広げることが重要だが、思った以上に子どもたちの選択肢は少ないと感じる。例えば対象となるご家族が興味を持てるようなきっかけを作ることや、市民に向けた活動のひとつとして「歴史ガイドマイスター制度」等のプログラム作りを市がサポートしていくことが重要である。

また、全てのステークホルダーとの関係構築が不可欠だ。府中市のステークホルダーは一人暮らしの大学生、勤務をしている人たちが考えられるが、そういった人たちが結婚して居住してくれるための働きかけが必要である。

また、府中の歴史を他自治体と比較してその魅力を前面に出していくべきである。その一方、府中は潜在的な材料は沢山あり、不登校の中学生に向けたメタバースの教室を開くといった取組もあるが、伝統的なものがあるからこそ新しいものにチャレンジできる可能性もある。さらには、伝統的な作品等の保存修復も同時に取り組んでいくべきである。

副会長： 市の文化芸術推進に対して府中文化振興財団が重要な役割を担っていることを感じた。引き続き力を入れていきたい。

骨子案についてだが、1ページの「1 策定の背景」は、話の流れからすると(1)～(3)はこのままの順番の方が良いと感じる。「2 策定の目的」については、根本的に大きく変えるものはない。時代に即して多様性など新しい要素を盛り込めると良い。「4 計画の期間(案)」については、案とあるが、令和8年から令和15年の期間については決定事項として案という記載は削除しても良いのではないか。「6 計画における文化・芸術の範囲」については、前回とほぼ同じであり、「②狭義の捉え方」についても変わるものでないを考える。狭義の考え方に追加すべきことがあるか協議できれば良い。

3ページの「1 基本理念」は、これまでの計画の幹に当たる部分である

ため、これまでの計画に即した形で追加していくのが良いのではないか。

最後に「3 計画推進に向けて」には、協議会で協議した内容を盛り込んでいきたい。

委員： 他の委員から意見が出たが、企業連携は今どきの流れとして重要である。市から補助金を受けずに、自主イベントに関する立派な冊子を作成している団体もある。企業との連携で取り組んでいるのだろう。

多様な主体との連携については、大学との連携が必要である。府中の森芸術劇場でも取り組んでおり、民間では、くらやみ祭りで東京農工大学の学生が参画している。こういった民間レベルでの連携が今後必要になる。府中市には東京外国語大学もあるため、視野に入れていきたい。

文化芸術推進という言葉が固いのはその通りである。文化芸術は、「お硬い」イメージがあるが、生活の身近なところに文化がある。文化に関係ないと考えている人も実は文化に触れている。お祭りに行くだけでも伝統文化に触れていることになる。コロナの時のように、失われて初めて文化の重要性に気付く。そのくらい文化が自然にあるものであり、失われたら大変だということ計画の中で謳っていきたい。

委員： 地域連携、市民連携、企業連携がこれからの10年では重要になる。生きていくこと自体が文化であり、文化は広義的にも様々な捉え方があり、深みがある言葉であると思うが、文化についてどのように言葉で表現していくか、紡いでいくかがポイントになる。

基本理念を改めて読むと「多様性を認め合い 人と文化が磨かれるまち」とあるが、「多様性を認め合う」とは人と人が違うということを学ぶことではないか。「人と文化が磨かれる」とあるが、人と文化の捉え方は人それぞれであり、どういう意味合いであるかが難しい。6つの項目から読み取れなくはないが、たった10文字の中に色々な意味合いが含まれていることをどう伝えるかがポイントになる。

文化は横断的、網羅的に様々な生き方に関わることであり、問題の解決策でもあり、表現の仕方でもある。狭く定義しすぎずに文化は様々なものを捉えることができるということをうまく表現できると、人間の営みに携わる様々なものが文化であるということが表現できるのではないか。

委員： 文化の広義の捉え方について、誰一人取り残さない、協働というキーワードを次のステップとして入れてほしい。改めて皆さんの意見をお聞きして、この計画が裾野を広げていくものになることを実感した。計画の名前、文化芸術に関わっている意識がない人たちにもいかに伝えていくかを検討したい。

会長： 基本理念として「多様性を認め合い 人と文化が磨かれるまち」とあるが、他の自治体でアンケートを集計した際に、90%の人たちが、文化が楽しみや人とのつながりを促進するとして、幸福度につながると答えていた。文化に関心ない人はそのことを知らない。人とのつながりが嫌な人もいるかもしれないが、文化が幸せにつながることを知ってもらうことが重要。文化を体験する場はあると思うが、無関心であったり行きづらかったりする人たちにどのようにアプローチできるかが重要である。

少子高齢社会になり、美術館や劇場の鑑賞者の人数は減っていく。歌舞伎座や新国立劇場のオペラなどは、コロナ禍を経て若い人たちは戻ってきたが、

高齢者が全く戻ってこないとのことだった。高齢者も含め、文化がいかに楽しく、幸せかを感じてもらおう場づくりが必要となっていく。

子どもは、親に依存せざるを得ず、親がいないと美術館などに連れて行ってもらえない。同じく地方の高齢者たちも、自分たちの子ども達が車を出さなければ移動が難しく、文化ホールに来なくなったという話もあり、自由に選択できないという実態がある。自分の意志でアクセスできるようになる仕組みなどを考えていく必要がある。全ての事情に向き合うのは難しくても、発想を持つだけで、事業やアクセスの仕方を開発できるのではないか。

文化のアーカイブ化について、他県でも同様の会議に参加しているが、その県は少子高齢化が顕著である。村がなくなり、集落がなくなるところが多い。そこで、歴史博物館の職員が文化、習慣、食などについての聴取調査をするようになった。少子高齢化が進むのであれば、文化資源をアーカイブ化したり、マイスター制度などを取り入れたりすることで、未来に掘り起こされる可能性が生まれる。

委員： パブリックアートの彫刻のメンテナンスはどこが所管となっているのか。

事務局： 美術館である。専門業者に依頼し、メンテナンスしている。

委員： それは安心である。メンテナンスも保存修復につながる。

どのような人たちを巻き込んで、経験や知識を世の中に還元していくかという観点から、世田谷美術館では世田谷美術館美術大学という事業を実施している。受講生が友の会会員になったり、子どもたちのボランティアをしたりしている。循環とはこういうことである。府中市でもそういった仕掛けづくりが必要だ。

子どもたちへのアプローチとして、子どもたちが自由に取り組める場所を広げることが重要である。

自分の暮らしの中に文化があるかどうかは大事だが、ヒントやきっかけがなければそこには行かない。文化芸術に関心がない人は一定数いるが、「府中学」を立ち上げるのはどうか。このまちの歴史から現在までをオーラル・ヒストリーも含めてアーカイブができるし、友達もできる。「文化は遊びだ」くらいにやっついていかないと、関心がない人は入ってこないだろう。大人が遊び心を持ってやっついていくことが大切だ。

今の社会を考えると、文化は平和につながると感じる。色々な文化を理解するだけでなく、そこに親しむことが重要であり、文化は色々な言語や宗教を超えて世界中の人々をつなげてきた。文化は平和に築くために必要であると子どもたちに伝えていくべきだと考える。

委員： アンケートから出てきた貴重な意見について、市民としてどのように扱い、開示するか、実現の可否も含めて組織にどのように落とし込むかが重要である。各施設をどのように管理しているのかを明確にして、骨子案の狭義の捉え方に入れ込むことが重要である。

アンケートの結果を、生成AIを使って分析してみてもどうか。

廃屋や引きこもり、孤独死といった府中市が抱える問題に対して文化芸術を使ってどう解決していくかを検討しながら、この骨子案を膨らませて行けると良い。

委員： 様々な家庭環境により、保護者らが子どもたちを文化芸術に触れる場所に

連れて行けないという状況があるのなら、市の職員等が地域の文化芸術団体と連携して学校で文化芸術に関する出張授業を実施する。そうすることで、市が狙っていることを保護者と子どもたちに漏れなく伝えられる方法を取れるのではないかと。保護者も積極的に子どもたちの文化芸術活動を応援する方向へ。

副会長： 府中の森芸術劇場は昨年4月から13か月間に渡り改修工事のため休館していることから、文化に触れる機会が低下していると読み取れるアンケート結果になったのではないかと受け止めており、2年後のアンケート結果が気になる場所である。5月にリニューアルオープンした後は、芸術文化の発信を再開して文化芸術の水準の向上に努めたい。

休館中はアウトリーチ活動として、様々な場所で演奏会等を行い、草の根活動をしてきた。5月以降、劇場舞台を中心に芸術文化を発信していく中で、無関心者へのアプローチ、きっかけ作りとしてアウトリーチ活動の継続は重要であると感じている。

会長： 文化の範囲は広義の方向で進めたい。副会長から狭義の捉え方や根本的なことも大事だという話があったが、狭義の捉え方は法律に結び付いており、確認時にあれば良い。これを前面に提示してしまうと、これだけだと思われてしまう。計画としての書き方を工夫したい。社会課題に文化で立ち向かっていく、文化で解決できることがあるという内容にできると良い。

多様な主体について、みなさんと共有できたが、多様な主体同士をつなげ、一緒に取り組んでいくかという部分の軸や、つなげる人が重要だ。例えば他の地域は、アーツカウンシルを作り、つなげる作業に積極的に取り組んだり、伝統芸能をどうすれば継承できるかということと一緒に考えることをアーツカウンシルに担わせたりしている。皆さんの思いは一致したが、どのようなやり方をしていけば良いかを考えて、骨子案を充実させていくことがこれからの課題だ。

委員： 計画が策定後の市の執行体制が見えていない。面白い計画ができては執行体制によってはうまくいかないこともある。執行体制について、委員である自分たちが理解していると計画に落とし込みやすいのではないかと。

会長： 全くその通りである。どう動かすかが重要である。協議会でもどうすれば施策を実行しやすくなるかを考えたい。

委員： 組織体制を考えることが重要だ。いつどこで誰がやるかといった組織体制を明確にして計画をスタートするべきだ。

会長： まちづくりとの連携は基本である。まちづくりと一緒に進めなければ広がらないこともある。実際にどのように取り組んでいくか、どのような組織を作っていくかについても積極的に議論したい。

委員： 短い期間でPDCAを回すシステムがあった方が良い。

会長： PDCAを回すためには評価が必要である。計画を推進していくための評価しやすい指標が必要である。

6 その他

次回の府中市文化芸術推進計画検討協議会の日程については、後日連絡することで了承を得た。